

熊沢誠著『労働組合運動とはなにか―絆のある働き方をもとめて―』（岩波書店、2013年）

「労働組合運動とはなにか」というタイトルどおり、本書では労働組合運動の歴史、現状を分析し、そして今後のあるべき姿が提起されている。著者は労働組合を「具体的な労働条件について、労働者の発言や決定参加を保障するもの、そのような労使関係を形成するもの」とし、今、労働組合運動を語る理由について、格差社会が顕在化し、新自由主義が台頭を続けるなかで、「労働者の日常にとって労働組合の意義が薄くなってきた」と記している。

第1章で思想、機能、組織形態といった労働組合の原点が語られ、続く第2章と第3章では、欧米の労働組合と日本の労働組合のこれまでの歩みが綴られている。そして、第4章で現在の日本の労働組合運動についての考察が行われたうえで、第5章では労働組合の新たな形態の事例を挙げながら、今後労働組合が進むべき方向性が示されている。そのなかでは著者特有の表現でもある“ノンエリート”な労働者を意識した彼ら・彼女らの労働組合運動という視点が色濃く示されている。

第1章から第3章の労働組合原論、そして欧米と日本の労働組合のこれまでの歴史の振り返りは、現在の日本の労使関係や労働組合運動に対する分析、これからの労働組合運動の方向性の検討という意味でも、大いに役に立つだろう。ただし、続く第4章で記されているように、全体を通じて企業別組合中心の日本の労働組合運動に対する批判的考察が行われており、読み進める上で、読者側の立ち位置が試されているようにも思う。

「労働組合の存在は今どこに？」と題された第4章では、「戦後労働組合運動が達成できなかったこと」として、企業の枠を超えた労働条件の標準化、個人別賃金の標準化、非正規労働者の処遇規制が挙げられている。また、労働組合が能力主義管理のもとで労働条件決定の＜個人処遇化＞を無条件に承認した、との分析がされており、このことは、非正規労働者だけでなく、正社員（＝組合員）双方にとって企業別組合が機能しきれていない、という指摘といえる。

こうした現状分析を踏まえたうえで、第5章では、今後の労働組合の方向性として、若者、女性、非正規労働者、中小企業で働く人たち、すなわち、これまでの大企業男性正社員中心の労働組合と距離の遠かった人たちによる連帯の必要性が提起されている。また、これらの労働組合を必要としているであろう人たちとの連帯を図るうえで、組合は「単産機能を強化した上での産業別組合の職場支部」という形式が望ましい、という。さらに、後半では、非正規労働者を組織する新たな組合の形として、企業別組合とは異なる形態を持つ組合、いわゆるクラフトユニオンやコミュニティユニオンの事例がその実績だけでなく、困難さとともに示されている。

近年、非正規労働者の組織化は労働組合全体の主要な取り組みとして位置付けられてきたが、非正規労働者の増加、そして、組織率の低下が止まらない現状のなかで、本書は、企業別組合、産業別組合、ナショナルセンター、コミュニティユニオンがいかに連携し、いかに役割分担をしていくのか、労働組合の今後にとって重要かつ根本的な課題を投げかけている。（後藤嘉代）